






令和6年6月の安らぎ通信

目次

- (1)  山火事、温暖化で大規模に 暖冬、一部地域でリスク増
- (2)  防災情報を再編 「大雨」など警戒度5段階
- (3)  線状降水帯予測 きめ細かく 都道府県単位で発信
- (4)  災害時の車中泊場所 支援拠点など指定
- (5)  和歌山 南海トラフへ備え 沿岸部で計画づくり進む

(1) 山火事、温暖化で大規模に

暖冬、一部地域でリスク増

- * 山火事は気温が上がる春（3～5月）に起きやすくなります。
 - * 国内の山火事の原因は焚火や野焼きなど、人の火の不始末が多いです。
 - * 世界的に山火事は大規模になっています。
 - * 2022年までの3年間の平均で、年800万ヘクタール前後の森林が焼失。
 - * 焼失面積は20年で2倍近くに拡大。
 - * 気温上昇により空気や地面が乾燥すると、発火や延焼が起きやすくなります。
 - * 山火事は乾燥エリアで頻発する傾向にありますが、リスクが低いとされてきた湿潤な地域でも近年、大規模な被害が起きました。
 - * 気候変動に伴い、通常発生しない場所でも火災が起き始めました。
 - * 日本は湿潤な気候に加え、人工林の成長により山中に日影が増え、地面や落ち葉が乾燥しにくくなりました。
 - * 結果、山火事の件数は減少しています。
 - * 2017～2021年の国内の山火事の発生件数は平均約1300件で、1990年代から6割程度減りました。
- (2024年5月15日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

(2) 防災情報を再編 「大雨」など警戒度5段階

気象庁 避難判断わかりやすく

- * 気象庁は避難に関する情報を再編。
- * 災害の種類を「洪水」「大雨」「土砂災害」「高潮」の4パターンに整理。

*それぞれの警戒度を 5 段階のレベルで示します。

(2024 年 5 月 15 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

(3) 線状降水帯予測 きめ細かく 都道府県単位で発信

*降水状況の予測範囲は、これまでの 5 キロ四方から 2 キロ四方に細分化。

*導入時に想定した線状降水帯予測の的中率は 25%。

*正確な予測が難しい状況には変わりありません。

(2024 年 5 月 16 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

(4) 災害時の車中泊場所 支援拠点など指定

内閣府、自治体向け指針

*内閣府は災害による避難者支援の一環として、車中泊向けのスペースや在宅避難者の支援拠点を事前に指定するよう自治体に促す方針。

*避難所に行けなくても同等の支援を受けられる環境を整えるのが狙い。

*車中泊は健康管理や行政側の状況確認などの面で課題があり、推奨はしません。

*各避難者が自由に場所を選ぶと、支援が行き届かない可能性があることから、自治体が避難スペースを事前に公表し、誘導します。

*車中泊はなるべく短期間で終え、避難所や宿泊施設への移動を勧めることも要請。

*在宅避難者の支援拠点は、水や食料を受け取ったり、トイレを使ったりしやすい場所とするように求めます。

(2024 年 5 月 21 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

(5) 和歌山 南海トラフへ備え 沿岸部で計画づくり進む

「復興準備」2 府 4 県で進捗トップ

*和歌山県は 2018 年、県内の自治体向けに「復興計画事前策定の手引き」を作成。

*発災後 10 年間で復興機関とします。

*政令市や県都のうち、復興準備で先行しているのは京都市。

*2016 年に復興計画マニュアルを策定しました。

(2024 年 5 月 25 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)

